

■東京で「満蒙開拓青少年義勇軍」描いた漫画や資料を展示 阪本牙城作品中心に「満蒙開拓」「義勇軍」考える

12月16〜24日、東京の千代田区立九段生涯学習館内の九段ギャラリーで、没後50年の漫画家・阪本牙城の作品とともに「満蒙開拓青少年義勇軍」関係の初めての展示が行ないました。

千代田・人権ネットワーク主催、坂本雅城没後50年展実行委員会共催、「満蒙開拓」を考える連絡会、シベリア抑留者・支援センター、タンクローアウト、満蒙開拓平和通信、ピースあいち、細井博充氏などの協力を得て開催されたものです。

阪本牙城没後50年を機に

日本におけるロボット漫画の先駆けといわれる「タンク・タンクロー」の作者・阪本牙城（水墨画号は雅城、1895〜1973）没後50年に合わせて、阪本牙城作品を展示し、その生涯を振り返る企画でしたが、とりわけ阪

本牙城が各地を歩いて廻り、出会った人々や風景を記録し、さらに少年たちに漫画を描くことを教えた満洲での体験を掘り下げて考えてみようと思図した展示でした。



阪本牙城、45歳頃

昨年亡くなった作家の大江健三郎も小学生の頃に愛読した「タンク・タンクロー」の漫画で有名になった阪本牙城は、1939年44歳で東京での生活を切り上げて一家で満洲に渡り、各地の開拓団、義勇軍訓練所を訪ねながら

漫画と文章で貴重な記録を残しています。

『満洲建設勤労奉仕隊・漫画現地報告』（大陸建設社、1939年）、『鉄の兵隊』（月刊満洲社、1943年）、*Eブック・復刻版あり）などを著していますが、満洲新聞に連載された記事はほとんど残されてなく、今回国立国会図書館に保存されているマイクロフィルムから起こした複製29点を初公開しました。



1943年



1939年

五日市小学校（現・あきる野市）時代の写真から30代前半の頃に描かれた絵（「肉筆漫画開国六十年史図絵」）や満洲時代の貴重な写真、北朝鮮からの引き揚げの際の引揚船の乗船券（夫人用）、未公開原稿なども展示されました。

また、大江健三郎が阪本牙城に宛てた心のこもった直筆の手紙も初めて公開され、注目されました。（大江の「タンク・タンクロー」と阪本に対する敬愛とこだわりは『週刊朝日』1970年5月15日号匿名コラム「活字の周辺」、『図書』2011年9月号連載コラム「親密な手紙」などに記されていて、昨年没後に出版された岩波新書『親密な手紙』にも再録されています。）

晩年、漫画の筆を折り、専念された水墨画の代表作も展示され、優れた筆使いに感嘆する来場者も多くおられました。

満洲新聞連載の漫画と文章からも、満蒙開拓を推奨しつつ、実際に訓練所開拓団で汗を流す少年たちや団員たち

の苦勞や不条理に同情し、笑いとともに共感するエピソードや地元の古老への敬意も随所に見られ、ヒューマンな内容からは、軍国主義への傾斜とはやや距離を置いたような姿勢も推測されました。



阪本雅城略歴

1895年東京都あきる野市五日市に生まれる。東京府立第二中学校卒業。漫画家「牙城」を名乗り、ロボット漫画『タンク・タンクロー』を講談社「幼年倶楽部」に連載して人気を博す。東日、大毎小学生新聞に漫画『ジャンケンボンチャン』連載、金の星社刊。

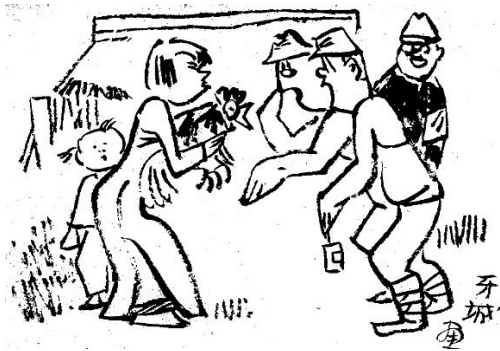
1939年満洲開拓総局の広報担当嘱託に。満洲各地の満蒙青少年義勇軍訓練所を訪ね、漫画指導。『漫画現地報告』『開拓三代記』『鉄の兵隊』など発表。水墨画も本格的に始める。

1945年8月ソ連の進攻を受け、開拓総局職員の留守家族850人をまとめ帰国の途に。途中北朝鮮で終戦を迎え、収容所などで1年間を過ごす。多くの苦難を体験。1946年帰国。その後は漫画家の筆を折り水墨画に専心。本名＝坂本雅城（まさき）、水墨画号は「雅城」。1973年没。行年77歳。

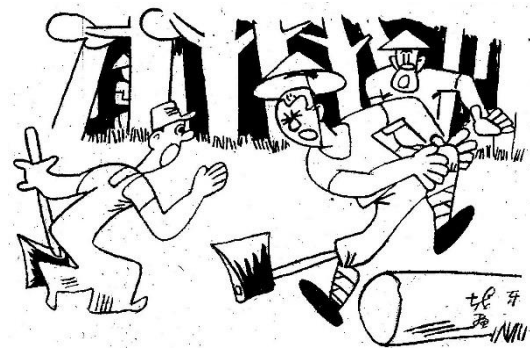


晩年の阪本牙城





「満洲新聞」1939.8.23.夕刊



「満洲新聞」1939.8.10.夕刊

細井芳男さんの原画も展示

阪本牙城は各訓練所で漫画指導を行い、少年たちに漫画を描く楽しさを教え、「満蒙開拓青少年義勇軍漫画部隊」を結成し、自ら漫画部隊長となり、作品のコンテストなども行いました。

その漫画部隊員だった細井芳男さん（1925〜2005）の作品集が昨年8月に名古屋のピースあいちで展示されたことを新聞記事で知り、ピースあいちにお願いして作品集（複製）の展示も実現、ご子息の細井博充さんをご紹介いただきました。別途、本誌発行人の末広一郎さんより連絡いただき、細井さんの作品集『満蒙開拓青少年義勇軍漫画・満洲篇』の原画115点を末広さんが保管しておられることを知りました。細井さんからお預かりして、画集を出版する計画だったのですが、そのままになっていたのでそうです。貴重な原画を全部お借りして、展示することができました。細井博充さんは名古屋にお住まいですが、展示初日に車で遠路お越しくださり、ギャラリ



ー・トークに加わって、父・芳男さんの思い出をお話しくれました。

細井芳男氏略歴

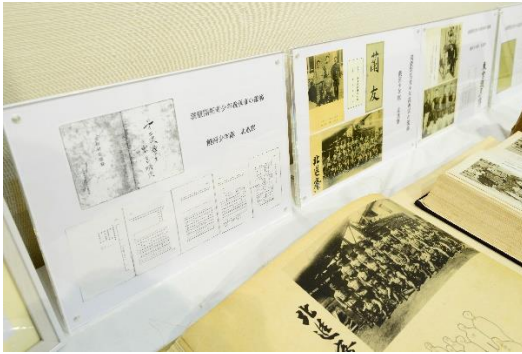
1925年愛知県安城市生まれ。1939年内原訓練所入所（第二次義勇隊）、満洲へ・一面波訓練所入所、孫呉県勝武訓練所、1942年勝武開拓団、1945年敗戦、ソ連に抑留。1949年帰国。1950年名古屋市緑区緑花台の開拓地に入植、農業を営む。晩年、満蒙開拓青少年義勇軍の回想を漫画で描く（内原篇・満洲篇）。2005年逝去、行年82歳。



今回の展示を機に、細井さんの漫画集が刊行されました。(↓頁参照)

「義勇軍」前史の貴重な資料も

「満蒙開拓」、とりわけあまり知られていない「満蒙開拓青少年義勇軍(隊)」についての紹介も力を入れ、大きな満洲の地図を掲示し、東宮春生さん(群馬満蒙開拓歴史研究会)提供の「義勇軍」の前に1935(昭和10)年試験的に送られた「^{ぎようが}饒河少年隊」(大和村北進寮)の貴重な史料なども関連図書とともに展示しました。いずれも初めて目にするものが多く、来場者の関心を引いていました。



饒河少年隊、大和村北進寮などの説明をする東宮春生さん

会場で行われたギャラリートークには一條三子さん(放送大学埼玉学習センター非常勤講師)、加藤聖文さん(国文学研究資料館研究部准教授)、藤井健志さん(東京学芸大学名誉教授)がゲストで登場、展示の見所や興味深いお話を聞かせてくださいました。関連したビデオ映像も連日上映し、好評でした。

「義勇軍」体験者の中島千代吉さん(横浜・94歳・写真右)、辰本俣教さん(八王子、92歳・写真左)も来場、絵や史料を見ながら、当時の思い出を話してくださいました。



坂本(阪本)家の親族の方々も多数来場され(写真右下)、知らなかった牙

城作品に触れて、関連動画なども観ながらファミリーヒストリーを思い起しておられました。

年末にもかかわらず三四〇人が来場、初めての展示を無事に終えることができました。ご協力いただいた皆様の方にお礼申し上げます。

描かれていない記憶・歴史も

最後に、準備・運営を担当した者の感想ですが、今回主に阪本牙城の作品と関係資料を収集しましたが、まだまだ知られていない作品や情報、物語が多く埋もれているのではないかと思います。阪本一家は戦後、北朝鮮・方岷での避難民生活を経て、着のみ着のまま帰国したため、満洲時代の作品などがあまり残っていないわけですが、本当に苦勞し、自ら体験したつらい記憶は、描き残されていないのではないかと考えられます。阪本にとって一番過酷だった体験は、敗戦後の北朝鮮経由の引き揚げの旅路と生活だったと推測されますが、当時の体験を描

いた図は、現在のところたった一枚しか残されていません。

細井博充さんは「父は戦後篇・抑留篇も続けて描こうとしていたが、あまりにつらすぎて描けず、途中で描きかけの紙を破って断念した。『ロスケの馬鹿野郎』と叫ぶ声も聞いた」と話されました。

さらに記憶と歴史の手がかりを集めながら、想像力を働かせて、描き残されていない歴史にも向き合っていかなければならないのではないのでしょうか。日本側の悲劇や被害だけでなく、「満蒙」の地で歴史に翻弄され、犠牲になった中国人やモンゴル人、ロシア人、朝鮮人らの悲劇や被害も含めて、もっと広く多角的に知る努力が必要ではないかと改めて感じました。

有光 健

(シベリア抑留者支援・記録センター)

*阪本牙城と義勇軍漫画部隊については『大東亜共栄圏のクルルジャパン』（大塚英志著、集英社新書）をご参照ください。



ギャラリートークの時間にはゲストの話を耳を傾けました